小学校国語科における
自分の考えや気持ちを適切に表現できる児童の育成
――　自分の考えを形成するための支えとなる言葉の指導を通して　――

長期研修員　　佐藤　真由美

《研究の概要》

本研究は、小学校国語科における自分の考えや気持ちを適切に表現できる児童の育成を目指したものである。

児童が自分の考えや気持ちを適切に表現できるようにすることを目指し、自分の考えを形成するための支えとなる言葉の指導を行う。指導の一つ目は、「支えとなる言葉を学ぶための支援」である。単元の学習過程に、「言葉を知る」「言葉を使う」「言葉のよさを実感する」学習場面を位置付け、言葉を正しく使える支援を行うことである。二つ目は、「支えとなる言葉を基に自分の考えを形成させるための支援」である。追究する過程に、児童が考えを形成する場面に合わせ、支えとなる言葉を基に考えの形成を促す支援を行うことである。

自分の考えを形成するための支えとなる言葉の指導を取り入れた授業を行うことにより、児童が自分の考えや気持ちを適切に表現できるようになることを実践を通して明らかにした。

キーワード　【国語一小　適切に表現　考えの形成　言葉　授業改善】

群馬県総合教育センター
分類記号：Ｇ０１－０１　令和２年度　２７３集

Ⅰ　主題設定の理由

中央教育審議会答申（平成28年）では、子供たちが未来を創り出していくための、国語教育における言語能力や情報活用能力の向上の必要性を挙げている。その背景には、子供たちを取り巻く言葉に関する課題が関係している。教育課程部会の「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」（平成28年）では、その課題の一つに、対話の不足といった「子供たちの人間関係の問題に、言葉によるコミュニケーションが深く関わっている」ことを挙げている。つまり、子供たちがこれからの社会に主体的に関わっていくには、言葉によるコミュニケーションが円滑にできるようになること、すなわち、言語能力が向上し、自分の考えや気持ちを適切に表現できるようになることが必要であると考える。

前出の「言語能力の向上に関する特別チームにおける審議の取りまとめ」では、表現するための力は、「思考から表現」の過程で働くとしている。具体的には、「表現した後、又は、表現しながら、考えを形成・深化させ、より良い表現にするために、文章を推敲したり、発話を調整したりする」と記されている。そして、言語能力は、このような過程を、適切な言語活動を繰り返すことで育成されるとしている。

小学校学習指導要領解説国語編（平成29年）では、全ての領域において、「考えの形成」に関する指導事項が位置付けられ、考えを形成する学習過程が重視されている。令和２年度群馬県学校教育の指針においても、「新学習指導要領で求める資質・能力の育成に向けた教育課程の編成・実施」とあり、学習指導要領の理念の実現に向けた授業改善が求められていることから、指導事項に新たに位置付けられた「考えの形成」に関わる授業改善が必要であると考えられる。

そこで、本研究では、児童が考えや気持ちを表現することに関わる「考えの形成」の指導に視点を当て、研究を行うこととした。

国語科は、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を育成することを目標とした教科である。さらに、前出の学習指導要領解説国語編に「言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としている」とある。つまり、国語科は、言葉に着目することを基盤とした教科である。したがって、児童が考えを形成する支えとなる言葉の指導に視点を当てることで、児童が自分の考えや気持ちを適切に表現できるようになると考えた。

研究協力校（以下、協力校）11名の教師に対して、言葉に関するアンケートを行った。その結果、特に話したり聞いたりする活動の中で、児童が、単元で扱う言葉を使って表現できていないため、その指導法を知りたいという多数の回答を得た。そこで、協力校における課題や不安といった実態調査を基にした具体的な授業改善として、児童が自分の考えや気持ちを適切に表現できるようにするために、「話すこと・聞くこと」の単元で授業実践を行うことにした。

以上のことから、自分の考えを形成するための支えとなる言葉の指導を通して、児童が自分の考えや気持ちを適切に表現できるようになると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究のねらい

小学校国語科の授業において、自分の考えを形成するための支えとなる言葉の指導を行うことにより、児童が自分の考えや気持ちを適切に表現できるようになることを実践を通して明らかにしていく。

Ⅲ　研究仮説

１　支えとなる言葉を学ぶための支援（見通し１）

単元の学習過程に、自分の考えを形成するための支えとなる、「言葉を知る」「言葉を使う」「言葉のよさを実感する」という学習場面を位置付け、支援を行うことで、児童は支えとなる言葉を正しく

使えるようになるであろう。

２　支えとなる言葉を基に自分の考えを形成させるための支援（見通し２）

追究する過程に、児童が考えを形成する場面に合わせ、「支えとなる言葉と考えをつなげるように促す」「支えとなる言葉を基に考えを交流させる」「支えとなる言葉を基に再考を促す」という支援を行うことで、児童は、支えとなる言葉を基に考えを形成しながら、自分の考えや気持ちを適切に表現できるようになるであろう。

Ⅳ　研究の内容

１　文言の定義

(1)　「自分の考えや気持ちを適切に表現できる」とは

本研究での「自分の考えや気持ちを適切に表現できる児童」とは、児童が、考えや気持ちを表す言葉を使って適切に表現できるようになることとする。考えや気持ちを適切に表現するには、後述の「『考えを形成する』とは」のとおり、考えを構築し、その考えを広げたり深めたりすることが関わっていると考える。その考えの形成から表現に至るまでには、言葉を基盤にしながら考えを形成したり、考えの広がりや深まりを言葉を使って表現したりといった、考えや気持ちを表す言葉を使うことで、適切に考えや気持ちを表現できるようになると考える。

(2)　「考えを形成する」とは

本研究での「考えを形成する」とは、児童が、自分の考えや気持ちを表現するに当たり、自分の考えを構築し、交流などで広げた考えを、再考することによって深めていく、といった一連の児童の考えの流れを指す。

次に、表現と考えの形成の関係を説明する（図１）。文章を読んだり経験したりしたことから感じた「考えや気持ち」を誰かに伝えたい思いが、表現の原点であると捉える。考えや気持ちをよりよく伝えるために、まずは考えを「構築して」表現（交流）する。そして、その交流などで「広げた」考えを、再考することによって「深め」、考えや気持ちを適切に表現できるようになると考える。

なお、本研究の主題における「考え」とは、意見文や話合いなどで使用する論理的な表現、「気持ち」とは、感想や詩などで使用する情緒的な表現を指す。

図１　表現と考えの形成の関係

(3)　「支えとなる言葉」とは

本研究の「支えとなる言葉」とは、単元のねらいの到達に関わる、自分の考えを形成するための支えとなる言葉のことを指す。例えば、教科書に「重要語句」として挙がっている言葉や、例文の欄外に「ポイント」として抽出されている言葉のことである。

２　手立ての説明

本研究は、自分の考えを形成するための支えとなる言葉の指導を取り入れた授業を行うことにより、児童が自分の考えや気持ちを適切に表現できるようにしていこうとするものである。

児童が言葉を支えに考えを形成する前提として、支えとなる言葉そのものを正しく使う必要がある。

そこで、本研究では、二つの手立てを以下のように設定した。一つ目は「支えとなる言葉を学ぶための支援」、二つ目は「支えとなる言葉を基に自分の考えを形成させるための支援」である。児童が支えとなる言葉そのものを正しく使えるようになることで、支えとなる言葉を基に、考えを形成させていけるようになると考える。そして、これらの「言葉の指導」は、単元のねらいの達成の助けにもつながる。

以下、それぞれの支援について説明していく。

(1)　「支えとなる言葉を学ぶための支援」

「支えとなる言葉を学ぶための支援」とは、単元の学習過程に、「言葉を知る」「言葉を使う」「言葉のよさを実感する」学習場面を位置付け、言葉を正しく使える支援を行うことである。つかむ過程では、「言葉を知る」、追究する過程では、「言葉を使う」「言葉のよさを実感する」学習場面を位置付ける。

学習場面を、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域ごとにまとめると、表１となる。

表１　領域ごとの「支えとなる言葉を学ぶための支援」

学習場面（過程）	A　話すこと・聞くこと	B　書くこと	C　読むこと
言葉を知る（つかむ）	単元で扱う言葉の使い方を整理させる。	単元で扱う言葉の使い方を整理させる。	単元で扱う言葉を中心にした意味調べをさせる。
言葉を使う（追究する）	伝えたいことに合わせて、言葉を選ばせる。	単元で扱う言葉を使った文を例示したり短文作りをさせたりする。	自分の体験と結び付けて考えさせる。
言葉のよさを実感する（追究する）	自分と友達が使った言葉を比較させる。	別の言葉に置き換えた違いを比較させる。	使われている言葉と別の言葉に置き換えた違いを比較させる。

以下、それぞれの学習場面の支援について説明する。

①　「言葉を知る」

「言葉を知る」とは、児童が言葉を知り、単元の中でその言葉を使う基盤を作ることである。つかむ過程の中で、単元で扱う言葉の意味や、使う場面を学習することを通して、児童が「言葉を知る」ことができると考える。例えば、登場人物の心情を、描写を基に捉える物語文の学習では、登場人物の心情を表す言葉を中心に意味調べをするように促すことで、単元で扱う心情を表す言葉を知ることができる。単元で扱う言葉に着目させる支援をすることが、「言葉を知る」学習場面での支援の目的である。

②　「言葉を使う」

「言葉を使う」とは、児童が単元で扱う言葉を実際に使い、知っている言葉を使える言葉にしていくことである。追究する過程の中で、伝えたいことに合う言葉を考える学習を通して、児童が「言葉を使う」ことができると考える。例えば、相手の発言を受けて話をつなぐ話合いの学習では、相手の意見に対する感想を表す言葉の中から、自分が伝えたいことに合う言葉を選ぶように促すことで、単元で扱う話をつなぐ言葉を使うことができる。単元で扱う言葉の中から、児童の伝えたいことに合わせて言葉を選ばせる支援をすることが、「言葉を使う」学習場面での支援の目的である。

③　「言葉のよさを実感する」

「言葉のよさを実感する」とは、児童が使った言葉に関する視点を増やして、今後も使いこなせるようにしていくことである。追究する過程の中で、言葉を比較することを通して、児童が「言葉のよさを実感する」ことができると考える。例えば、感じたことや想像したことを書く学習の推敲

の場面で、自分が使った気持ちを表す言葉を、別の気持ちを表す言葉に置き換えた違いを比較するように促すことで、児童が自分の気持ちを表すのに適した言葉のよさを実感することができる（図２）。自分が使った言葉と別の言葉を比較させる支援をすることが、「言葉のよさを実感する」学習場面での支援の目的である。

以上のことから、支えとなる言葉を学ぶための支援を行うことで、支えとなる言葉が正しく使えるようになり、それらの言葉を基に、考えの形成につなげることができると考える。

教師（T）と児童（C）

【感じたことや想像したことを書く学習】

C：友達が来るのを楽しみに待っていました。

T：（支えとなる言葉を示しながら）「楽しみ」と「わくわくする」はどう違いますか。

C：「わくわくする」方が、早く来てほしい私の気持ちがよく伝わるね。「わくわくしながら待っていました」と書いてみよう。

※下線部は研究に関わる教師の支援例

図２　「言葉のよさを実感する」学習場面での支援例

⑵　「支えとなる言葉を基に自分の考えを形成させるための支援」

「支えとなる言葉を基に自分の考えを形成させるための支援」とは、追究する過程に、児童が考えを形成する場面に合わせ、支えとなる言葉を基に考えの形成を促す支援を行うことである。具体的には、「支えとなる言葉と考えをつなげるように促す」「支えとなる言葉を基に考えを交流させる」「支えとなる言葉を基に再考を促す」の三つの支援のことである。

①　「支えとなる言葉と考えをつなげるように促す」

「支えとなる言葉と考えをつなげるように促す」支援とは、児童が考えを構築する場面に合わせて、支えとなる言葉と考えをつなげるように促す支援のことである。例えば、「話すこと・聞くこと」におけるインタビューの質問内容を考える学習場面で、支えとなる言葉の「～について聞く」「～をしているときの気持ち」「よかったとき」「つらいとき」等の、目的をもって必要な情報を聞き出す言葉を使って、質問したいことを表現するように促す支援のことである。児童が、支えとなる言葉を基に、自分の考えや気持ちを構築していくことが、「支えとなる言葉と考えをつなげるように促す」支援の目的である。

②　「支えとなる言葉を基に考えを交流させる」

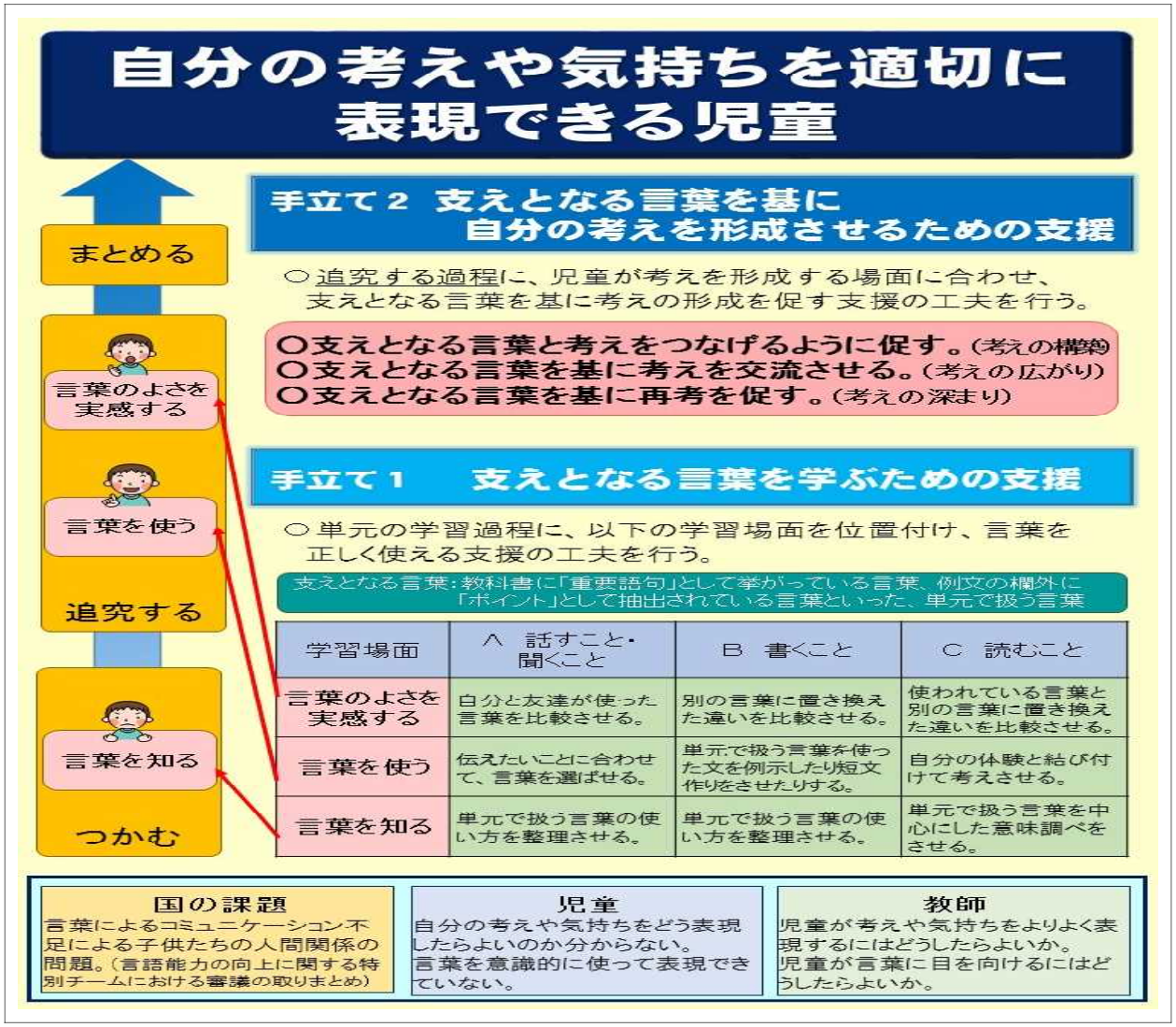
「支えとなる言葉を基に考えを交流させる」支援とは、児童が考えを広げる場面に合わせて、支えとなる言葉を基に、互いの考えを交流させる支援のことである。例えば、「書くこと」における報告文の学習で、「調べたことや聞いたことが（支えとなる言葉の）『～ということです』『～そうです』となっているか、友達の文章を確認しましょう」として、互いの文章を推敲させる支援のことである。児童が、支えとなる言葉という共通した言葉を基に交流することで、その言葉を目安に互いの考えをよりよく知ることができるようにしていくことが「支えとなる言葉を基に考えを交流させる」支援の目的である。互いの考えをよりよく知ることは、児童が様々な考えに触れることでもあり、児童の考えの広がりにもつながると考える。

③　「支えとなる言葉を基に再考を促す」

「支えとなる言葉を基に再考を促す」支援とは、児童が考えを深める場面に合わせて、支えとなる言葉を基に考えの変化を明確にさせながら、再考を促す支援のことである。特に、「どうして変化したのか」の「どうして」の部分に支えとなる言葉を加えることで、何が考えに変化をもたらしたのかがより明確になると考える。児童が、支えとなる言葉から、自分の考えの変化をより明確に知ることができるようにしていくことが、「支えとなる言葉を基に再考を促す」支援の目的である。考えの変化の原因をたどることは、広げた考えを、再考することによってどのように考えを深めていったかをたどることでもあり、児童が考えの深まりを知ることにもつながると考える。

以上のことから、支えとなる言葉を基に自分の考えを形成させることで、児童が支えとなる言葉を使いながら、自分の考えや気持ちを表現することができると考える。さらに、自分の考えや気持ちを表現することは、学んだことを表現することでもあり、単元のねらいの達成にもつながると考える。

３　研究構想図



Ⅴ　実践の計画と方法

１　授業実践の概要

対　象	研究協力校第１学年１組（22名）
期　間	令和２年10月29日～11月９日（全６時間）
単元名	きいて、しらせよう「ともだちの こと、しらせよう」
支えとなる言葉の概要	自分が聞きたいことを落とさずに聞く「いつ・どこで・だれが・どのように」といった言葉を支えとなる言葉とし、二人組で質問し合った。
対　象	研究協力校第２学年１組（12名）
期　間	令和２年10月26日～11月９日（全７時間）
単元名	みんなで話をつなげよう「そうだんにのってください」
支えとなる言葉の概要	相手の発言を受けて話をつなぐ「賛成・同じ・よい考え・質問・どんな」といった言葉を支えとなる言葉とし、班で話し合った。
対　象	研究協力校第３学年１組（29名）
期　間	令和２年10月22日～11月４日（全７時間）
単元名	進行を考えながら話し合おう「はんで意見をまとめよう」
支えとなる言葉の概要	進行を考えながら話し合う「理由・詳しく・賛成・反対・同じ・違う・整理」といった言葉を支えとなる言葉とし、班で話し合った。

対　象	研究協力校第５学年１組（25名）
期　間	令和２年10月14日～10月21日（全６時間）
単元名	たがいの立場を明確にして話し合おう「よりよい学校生活のために」
支えとなる言葉の概要	議題に対する互いの立場を明確にして話し合う「現状・問題点・解決方法・具体的・原因」といった言葉を支えとなる言葉とし、班で話し合った。
対　象	研究協力校第６学年１組（14名）
期　間	令和２年11月９日～11月25日（全６時間）
単元名	目的や条件に応じて、計画的に話し合おう「みんなで楽しく過ごすために」
支えとなる言葉の概要	「Ⅵ　実践の結果と考察」にて説明

なお、授業実践の中で使用した、二つの手立ての具体的な支援とそれに対する児童の姿を記したものを別途資料として掲載する。

２　検証計画

検証項目	検証の観点	検証の方法
見通し１	「言葉を知る」「言葉を使う」「言葉のよさを実感する」学習場面での「支えとなる言葉を学ぶ支援」により、児童は支えとなる言葉を正しく使えるようになったか。	教師の支援に対する、授業中の児童の発言やつぶやき
見通し２	児童が考えを形成する場面に合わせた「支えとなる言葉と考えをつなげるように促す」「支えとなる言葉を基に考えを交流させる」「支えとなる言葉を基に再考を促す」という「支えとなる言葉を基に自分の考えを形成させるための支援」により、児童は形成した考えを基に自分の考えや気持ちを適切に表現できたか。	教師の支援に対する、活動中の児童が発した言葉や振り返り

３　目標・評価規準

単元名	第６学年　目的や条件に応じて、計画的に話し合おう「みんなで楽しく過ごすために」	
目標	○言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付くことができる。（知識及び技能（1）ア） ○「話すこと・聞くこと」において、互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすることができる。（思考力・判断力・表現力等（1）オ） ○「話すこと・聞くこと」において、目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討することができる。（思考力、判断力、表現力等（1）ア） ○言葉を通じて積極的に人と関わり、目的や条件に応じて、よりよい解決に向けて見通しをもって話し合うことができる。（学びに向かう力、人間性等）	
評価規準	知識・技能	言葉には、相手とのつながりをつくる働きがあることに気付いている。
	思考・判断・表現	互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりしている。 目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討している。
	主体的に学習に取り組む態度	言葉を通じて積極的に人と関わり、目的や条件に応じて、見通しをもって話し合おうとしている。

４　指導計画

時程	過程	学習活動	○指導上の留意点 □ 研究に関わる支援
第1時	つかむ	本時の学習課題：単元の学習課題を知ろう。	
		・６年生として、今までに学校や地域の行事の中心と	○自分たちが周りの人のために活動してきたことを思い出し、更によい活動をしていこうという意欲を高めさせる。

		なって活動してきたことを思い出す。 ・話し合う目的や条件を確かめ、学習の見通しをもつ。	
		単元の学習課題 目的や条件に合わせて計画的に話し合い、１年生と遊ぶ内容を決めよう。	
		・計画的に話し合うために必要なことを考え、共通理解する。	**手立て１「言葉を知る」** ○計画的に話し合うために必要なことを表現する言葉をそれぞれ考え、使う場面ごとに整理させる。
第2時	追究する	本時の学習課題：話合いの役割を決め、進行計画を立てよう。	
		・班ごとに、話合いの役割や時間配分等を決める。	○「広げる話合い」と「まとめる話合い」があることを確認する場を設ける。
第3時		本時の学習課題：主張・理由・根拠を明確にして自分の考えをまとめよう。	
		・主張・理由・根拠を明確にして構成を考える。	**手立て２「支えとなる言葉と考えをつなげるように促す」** ○支えとなる言葉を使って構成を考えるように促す。
第4時		本時の学習課題：目的や条件に応じて、進行計画に沿って話し合おう。	
		・進行計画に沿って班ごとに話し合う。 ・話合いをしていない班は、計画的に話し合っているかを聞く。	○話合いの仕方や流れ、ポイントなどを確認してから、班ごとに話し合わせる。 **手立て２「支えとなる言葉を基に考えを交流させる」** ○様々な考えを知り、考えの広がりを促すために、発言の機会が増える少人数での話合い活動の場を設定する。 ○支えとなる言葉を基に相手の意見を聞いて、自分の考えと比較することを話合いの前に提示する。 **手立て１「言葉を使う」** ○児童の伝えたいことに合わせて、支えとなる言葉を選んで使うように促す。
第5時		本時の学習課題：話し合った結果を共有しよう。	
		・話し合った結果や感想を共有する。	○交流の視点は、 ①計画的な話合いのために、どのようなことに気を付けたか。 ②話合いを通した自分の考えの変化(しなかったこと)とその理由。 ③交流会の遊びと1年生の様子、とする。 **手立て１「言葉のよさを実感する」** ○友達が使った他の支えとなる言葉と比較させることで、言葉のよさが実感できるように促す。 **手立て２　「支えとなる言葉を基に再考を促す」** ○児童の考えが深められるようにするために、どの支えとなる言葉から考えが変わったかを想起させる。
第6時	まとめる	本時の学習課題：計画的に話し合う方法をまとめよう。	
		・班で計画的に話し合う中で、どのような力が身に付いたのかを振り返る。	

		・ボールの使い方に関する場面を例に、よりよい伝え方について考える。	○自分の考えや事情の伝え方に必要な言葉について考え、二人一組で対話をさせる。新たな言葉に気付いたら共通理解をする場を設ける。

Ⅵ　実践の結果と考察

１　支えとなる言葉を学ぶための支援（見通し１）

６学年の授業実践から、それぞれの学習場面での教師の支援の詳細と児童の姿を述べる。なお、「支えとなる言葉」は、「話をつないだ話合いができる言葉」「計画的な話合いが上手になる言葉」等、それぞれの学年の中で名称を付けたが、「支えとなる言葉」と統一して表記する。

(1)　「言葉を知る」

「言葉を知る」学習場面では、「計画的に話し合うために必要なことを考え、共通理解する」学習活動の中で、「計画的に話し合うために必要なことを表現する言葉をそれぞれ考え、使う場面ごとに整理させる」支援を行った。

・目的や条件を確かめる。
・話合いの前に、自分の主張や理由、根拠を明らかにしておく。
・お互いの考えをよく聞いて、問題点を見付けて伝える。
・考えを広げる話合いと、まとめる話合いを繰り返して、結論を出す。

図３　計画的に話し合うために必要なこと

まず、計画的に話し合うために必要なことを考え、共通理解をさせた（図３）。次に、児童に言葉による解決の見通しをもたせるために、「計画的に話し合うために必要なことを伝える言葉」をそれぞれ考えるように促し、児童が教科書から言葉を見付けやすいと推測される「主張や理由、根拠を表す言葉」を初めに取り上げ、「主張や理由・根拠を明らかにして伝えるにはどの言葉を使えばよいのでしょうか」と発問した。児童は、教科書から「～がよいと思う」「賛成（反対）だ」といった該当する言葉をすぐに見付けることができた。さらに、話合いの場面でその言葉を正しく使えるようにするために、「かくれんぼ」を主張することを例に、それらの言葉を使う場面を想定した対話を行わせた。その結果、今回は、一人一人が遊びを主張する話合いの始めの場面で、主張は「思う」「考える」、理由は「から」、根拠は「ということがあった」「自分が～だった」といった言葉を使って表現すればよいことを共通理解できた（図４）。同様の手順で、上記以外の計画的に話し合うために必要なことを表す言葉も整理し、本単元での支えとなる言葉として設定した（図５）。「問題点」については、教科書や対話から、「まとめる」については、教科書や５学年の話合い活動の経験から言葉を見付け、整理させた。支えとなる言葉の一覧は、ノートに貼ったり教室に掲示したりして、常に確認して使えるようにした。なお、この支えとなる言葉は、話合いの場面ごとに使い分けることや、「主張」「問題点」といったカテゴリの言葉も支えとなる言葉として使えることも確認した。

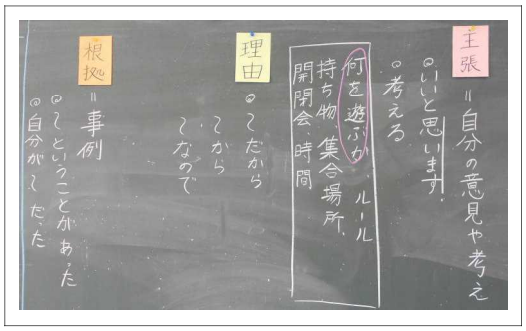


図４　自分の主張・理由・根拠を明らかにして伝える言葉

主　　張：である・思う・考える
理　　由：だから・から・ので
根　　拠：～ということがあった
　　自分が～だった
問 題 点：反対・～の部分は賛成
　　可能性がある
まとめる：目的・条件・比べる・整理
※「主張」「問題点」といったカテゴリの言葉も支えとなる言葉に含まれる。

図５　使う場面ごとに整理した支えとなる言葉

このように、単元の「つかむ過程」に、単元で扱う言葉を取り上げ、使う場面ごとに整理させる支援をすることで、児童は、実際に話し合う場面をイメージしながら、計画的に話し合うために必

要なことを伝える言葉を見付けて整理することができた。このことから、児童は、支えとなる言葉を知ることを通して、計画的に話し合うという単元の学習課題をつかむことができたと考える。

(2)　「言葉を使う」

「言葉を使う」学習場面では、「進行計画に沿ってグループで話し合う」学習活動の中で、「児童の伝えたいことに合わせて、支えとなる言葉を選んで使うように促す」支援を行った。

話合いの前に、支えとなる言葉の使い方や使う場面、進行に困ったときには支えとなる言葉を使うとよいことを確認する場を設けた。その結果、話合いの場面ごとに支えとなる言葉を使いながら計画的に話合いを進めるのはもちろんのこと、話合いの進行が滞った場合でも、どの支えとなる言葉を使ったらよいかを班の中で相談し、解決している姿が見られた。また、多くの遊びが挙がり、それぞれの遊びに対する意見が挙がったものの、その後にどう話合いを進めていけばよいかを悩んでいる児童が見られた。そのため、広がった意見をまとめる場面であることを確認した上で、「まとめる」ことを表す言葉の中から、どう決めていきたいのかを問いかけた。その結果、この児童は、まずは遊びの数を絞り込みたいと考え、「目的や条件に合っている遊びを検討しよう」と発言した。この児童の班は、その後、目的や条件と照らし合わせた遊びの検討をし、計画的に話合いを進めることができた。

このように、単元の「追究する過程」に、児童が伝えたいことに合わせて支えとなる言葉を選ばせる支援をすることで、児童が支えとなる言葉を使いながら、自信をもって意見を言い、計画的に話し合うことができた。伝えたいことに合わせて支えとなる言葉を選ばせる支援は、滞った話合いが進んだり、発言に困った児童の悩みが解決したりしたことから、計画的な話合いをするためにどうしたらよいかということや、自分の考えを表現するにはどうしたらよいかといったことを解決するための有効な支援であると考えられる。

(3)　「言葉のよさを実感する」

「言葉のよさを実感する」学習場面では、「話し合った結果や感想を共有する」学習活動の中で、「友達が使った他の支えとなる言葉と比較させることで、言葉のよさが実感できるように促す」支援を行った。

計画的な話合いのために、どのようなことに気を付けたかを交流の視点の一つ目とし、特に、自分が使った支えとなる言葉や効果について互いに交流すると、共通点や相違点が見付かることを確認した。交流の後、「問題点を言うときに、『ボールに人が集まるから反対です』と言った」と、自分が使った言葉のみに目が向いている児童がいたため、「問題点を言うときに、友達はどの言葉を使っていましたか」と言葉をかけた。この言葉かけに対して、児童は、「友達は、『可能性がある』と言っていたから、遊ぶときのことを考えて問題点を言っていたのがよく分かった。今度使ってみよう」と振り返った。この児童は、問題点を表す支えとなる言葉の中から、問題点を想定して伝えるには、「可能性がある」という言葉の方が適切だと考え、次の機会に使いたいと、言葉のよさを実感することができた。

このように、単元の「追究する過程」に、自分が使った言葉と別の言葉を比較させる支援をすることで、児童は、言葉に目を向けながら自分の活動を振り返ることができた。また、「『問題点』を伝える言葉でも、話合いの内容によって『可能性がある』『反対』を使い分けると適切に表現できる」といった、言葉に関する視点を増やすこともできた。これらのことから、児童が言葉のよさを実感することをきっかけに、言葉を使うことの関心がより高まったと推測される。また、これらの児童の姿は、単元のねらいである、計画的に話し合うことが達成された姿でもあると考えられる。

２　支えとなる言葉を基に自分の考えを形成させるための支援（見通し２）

６学年の授業実践から、それぞれの学習場面での教師の支援の詳細と児童の姿を述べる。

(1)　「支えとなる言葉と考えをつなげるように促す」

児童が考えを構築する場面で行った教師の支援は、「主張・理由・根拠を明確にして構成を考える」学習活動の中で、「支えとなる言葉を使って構成を考えるように促す」ことである。

まず、交流会の遊びを個人で考える場面で、「言葉を知る」で整理した支えとなる言葉を基に構成を考えるとよいことを伝えた。特に、交流会にふさわしいと考える遊びの「理由」と「根拠」を明確に伝えられるようにするために、理由は、文末に「から」を使って交流会の目的や条件にどのように合っているのかを書くこと、根拠は文末に「ということがあった」「自分が～だった」を使って自分の見聞や経験を書くことを、第１時で行った対話の活動を想起させながら確認した。その結果、児童は、支えとなる言葉を使って、自分が主張する遊びの理由や根拠をノートに書くことができた（図６）。

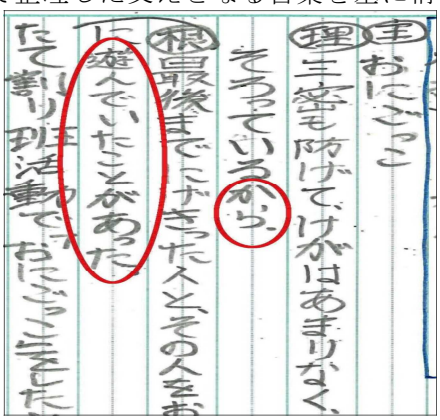


図６　支えとなる言葉を使って考えを構築した児童のノート

このように、単元の「追究する過程」で、児童が考えを構築する場面に合わせて、「支えとなる言葉と考えをつなげるように促す」支援をすることで、児童は、「から」「ということがあった」といった支えとなる言葉を基にして、考えを構築することができた。これらのことから、児童が考えを構築する場面で、支えとなる言葉と考えをつなげるように促す支援をすることで、筋道を立てて自分の考えを構築できた考えられる。

(2)　「支えとなる言葉を基に考えを交流させる」

児童が考えを広げる場面で行った教師の支援は、「進行計画に沿って班ごとに話し合う」学習活動の中で、「様々な考えを知り、考えの広がりを促すために、発言の機会が増える少人数での話合い活動の場を設定する」ことと、「支えとなる言葉を基に相手の意見を聞いて、自分の考えと比較することを話合いの前に提示する」ことである。

まず、少人数での話合い活動の場を設定した。教室の中央が話合いをする班、その周りを計画的に話合いができているかを聞いている班として設定した。少人数での話合い活動の場を設定することで、児童一人一人が発言する機会を増やすことができ、それぞれの遊びについて、様々な視点から意見を交わすことができた。次に、話合いでは、相手が何について話しているかを考えながら聞く必要があることから、事前に、話し手に対しては「支えとなる言葉を使って、自分が何について話しているかを明確にする」ことを提示し、聞き手に対しては「話し手が使った支えとなる言葉を基に聞き、自分の考えと比較する」ことを提示し、実際に話合いを行えるようにした。ある班では、へびじゃんけんは互いの距離が近づきすぎてしまうのではないかという「問題点」が挙がり、その後、同様の「問題点」がある遊びはないかを検討することになった。さらに、それらの遊びのルールを工夫することによって「問題点」が解決されないかといった内容に話合いが広がっていった。また、聞く班の児童に、どのようなことに気を付けて聞けばよいと思うかと問いかけたところ、支えとなる言葉を使っていれば、計画的な話合いができたかが判断できるのではないかという発言があった。そこで、計画的な話合いができているかを判断する目安の一つとして、支えとなる言葉を基に聞くことを共通理解した。

このように、「追究する過程」で、児童が考えを広げる場面に合わせて、「支えとなる言葉を基に考えを交流させる」支援をすることで、計画的な話合いの相互評価ができるのはもちろんのこと、考えの共通点や相違点が明確になり、児童が互いの考えをよりよく知ることができた。これは、児童の考える視点が増え、児童の考えが広がることにもつながったと考えられる。

(3)　「支えとなる言葉を基に再考を促す」

児童が考えを深める場面で行った教師の支援は、「話し合った結果や感想を共有する」学習活動の中で、「児童の考えが深められるようにするために、どの支えとなる言葉から考えが変わったかを想起させる」ことである。

自分の話合いの結果や感想を共有する場面で、話合いを通した自分の考えの変化（しなかったことも含む）とその理由を共有することを交流の視点の二つ目とし、特に、自分の考えの変化を捉えやすくするには、どの支えとなる言葉から変わったのかを基に捉えるとよいことを伝えた。その結

果、話合いが終わった直後には、「ドッジボールがよいと思ったけれど、氷鬼もよい気がする」と振り返っていた児童が、本時では、「初めはドッジボールがよいと思ったけれど、道具を使う危険がない氷鬼がよいと思った」と発言していた。この児童は、話合いが終わった直後には、自分の考えの変化を感じてはいるものの、「変わった」という感想のみにとどまっていたが、支援を受けて、話合いの中で「問題点」として道具を使う危険性が挙がったために、自分が初めに主張したドッジボールよりも、道具を使う「問題点」のない氷鬼がよいと、自分の考えの変化を捉えていた。

このように、児童が考えを深める場面に合わせて、「支えとなる言葉を基に再考を促す」支援をすることで、児童が自分の考えの変化を明確に捉え、考えが深まったことを表現することができた。これは、単元のねらいである、計画的に話し合えたからこその変化であるとも考えられる。

3　他学年の実践の様子と単元を通した児童の振り返り

(1)　他学年の実践の様子

他学年の実践から、手立てごとの教師の支援と児童の姿を述べる。

①　「支えとなる言葉を学ぶための支援」

「言葉を知る」学習場面の５学年の実践では、支えとなる言葉を教科書や既習事項から見付ける支援の他、互いの主張に対する疑問を伝え合う活動を通して、支えとなる言葉を見付けるように促した。その結果、「具体的に」「原因」といった言葉を使って、自分の主張を詳しく説明したり、相手の主張を詳しく聞いたりしていけばよいのではないか、といった児童の発言をきっかけに、相手の主張を詳しく聞くことを通して、互いの立場を明確にできるような言葉が多く挙がった。

「言葉を使う」学習場面の１学年の実践では、支えとなる言葉を使った質問練習を数回に分けて行う場を設けた。一回目は、「いつ」「だれ」等を使って質問し、二回目は、「何曜日」「何人」等を使って質問するなど、その都度、使う言葉を自分で選んで質問させ、相手が何を答えたかを振り返らせた。その結果、児童は、質問と答えのつながりが分かり、練習後には、どの支えとなる言葉を使うかを自分で選びながら質問し、自分が聞きたいことを聞くことができた（図７）。

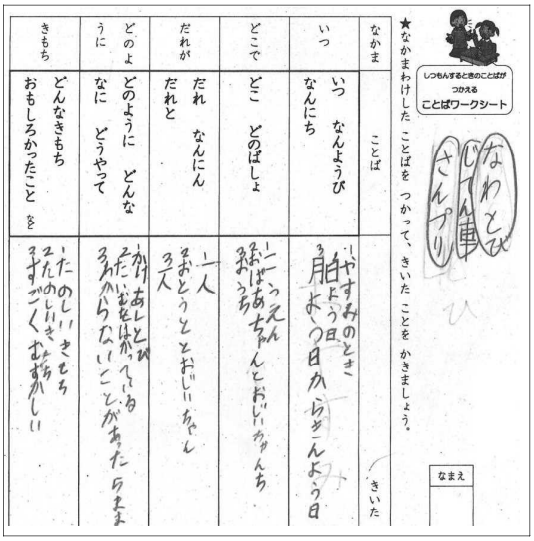


図７　１学年のワークシート

「言葉のよさを実感する」学習場面の５学年の実践では、話し合った結果や感想を共有する学習活動の中で、他の班の話合いのよかった点とその理由を発表する場を設けた。次に、それらの感想の中から、単元のめあてである、互いの立場を明確した話合いに関わる内容のものを取り上げ、場面ごとに支えとなる言葉と併せて分類した。最後に、児童に、分類したカテゴリの中から一つを選ばせ、自分が使った支えとなる言葉と、他の班が使った支えとなる言葉を比較した振り返りをさせた。その結果、「自分は、友達の意見に『よい』と思う、と言ったが、他の班の話合いを聞き、「『よい』よりも『賛成』を使った方が自分の意見が正しく伝わると思う。今度の話合いでは、『賛成や反対』を使って自分の意見をしっかりと伝えたい」と、友達が使った言葉と比較して、言葉の効果を分析していた児童の姿が見られた。

②　「支えとなる言葉を基に自分の考えを形成させるための支援」

「支えとなる言葉と考えをつなげるように促す」支援の５学年の実践では、考えを構築する場面で、自分の主張と支えとなる言葉を対応させる支援をした。まず、「廊下を走っている人がいるから禁止するポスターを貼る」といった、自分の主張を一文でノートに書かせた。次に、その主張を、支えとなる言葉である「現状」「問題点」「解決方法」に分けて付箋に書かせ、考えの構築を促した。その際、前述の「廊下を走っている人がいるから禁止するポスターを貼る」のように、主張の

問題点が明確になっていない児童には、なぜ廊下を走ってはいけないのか、といった補助発問をしながら個別支援を行った。その結果、この児童は、「問題点」に「危ないから」という言葉を加え、考えを構築することができた。

「支えとなる言葉を基に考えを交流させる」支援の３学年の実践では、児童の実態に合わせて、話し合っている児童と話合いを聞く児童をペアにして交流する場を設定した。また、話合いが停滞した場合には、聞く班の児童に、どの支えとなる言葉を使えば話合いが進むかを問いかけた。その結果、進行を考えて話し合うために必要なことをまとめる場面で、進行を考えて話し合うには、「目的・進め方」といった司会の役割が大切であると、聞く立場からみた意見が多く挙がった。

「支えとなる言葉を基に再考を促す」支援の２学年の実践では、話し合った結果や感想を共有する学習活動の中で、相談内容と解決策を発表する場を設けた。友達に多くの意見を言ってもらったものの、自分が納得できる解決策が挙がらなかった児童もいたため、解決策を明確に発表できた児童には、どの支えとなる言葉から解決したのかを問いかけた。ある児童は、弟の誕生日に何を送るかを相談したところ、誕生日には弟と遊ぶことにしたと発表した。児童の考えの変化を明確にさせるために、話合いのどの言葉から遊ぶことに変わったのかと言葉をかけたところ、「『どんな』遊びが好きなのか」と聞かれたために、物ではなく、弟が喜ぶ遊びに変えたと説明することができた。

このように、上記の支援によって、自分の考えを適切に伝えるにはどの言葉を使えばよいかをを分析している児童の姿が見られた。また、児童が支えとなる言葉を基に考えを形成し、表現につなげている姿が見られた。これらのことから、他学年においても、支えとなる言葉を学び、その言葉を基に考えを形成させる支援は有効であると考えられる。さらに、支えとなる言葉を基に話合いに向けた考えを構築している姿や、支えとなる言葉を話合いの指標にした姿が見られたことから、支えとなる言葉が、単元のねらいの達成の助けとなったと考えられる。

(2)　単元を通した児童の振り返り

単元を通した児童の振り返りを、学年ごとに取り上げる（図８）。

学年	振り返り
1	○　友達のことをしっかりと聞くことができた。 ○　聞きたいことがたくさん質問できた。 ○　友達の紹介が分かりやすかったのは、支えとなる言葉を使って聞けていたからだと思う。 ○　お父さんとかお母さんにも、支えとなる言葉を使って詳しく質問してみたい。
2	○　友達の意見に、「よい考え・確かめ」を使ってたくさん答えることができた。 ○　友達に自分の考えを言うことができた。 ○　「賛成・反対・よい考え」を使って、前よりも友達との話が続けられるようになってよかった。
3	○　自分の意見がはっきり言えた。 ○　司会が「目的・詳しく」を使って上手に話合いを進めていた。 ○　次の話合いでは、「理由・詳しく」などの意見を聞く言葉を使いながら司会を助けて、もっとスムーズに話合いができるようになりたい。
5	○　「賛成・反対」を使ったら、一人一人の意見がはっきりして話合いがうまく進んだ。 ○　「具体的に・例えば」を使って、友達の意見を詳しく聞けた。 ○　「同じ・違う」を使うともっとまとめやすくなると思うので、次の話合いで使ってみたい。 ○　友達が使った「どうか・だろうか」で問いかけて説得力をもたせたい。 ○　支えとなる言葉を使うだけで、こんなに話合いが進むと思わなかった。
6	○　実際に1年生と遊んだときに困らないように、遊んでいるところを想像して、「問題点」や「可能性」という言葉を使って問題点を挙げて話合いができた。 ○　1年生のことを考えながら話し合った。交流会では、1年生が楽しく安全に遊べたから、目的や条件に合った話合いができたと思う。 ○　計画的に話し合うための言葉に気を付けたら、困らずに話合いができた。 ○　中学生との交流でも、「理由は～だから」などの言葉を使って、自分の考えを伝えられるようにしたい。

図８　各学年の児童の振り返り

これらの振り返りから、考えを形成させるための支えとなる言葉の指導により、児童は、支えとなる言葉を基盤にしながら自分の考えを形成させることができたと考えられる。また、自分の考えをよりよく伝えたいときや、どのように伝えたらよいか悩んだときには、支えとなる言葉に立ち返って、自力解決している姿も見られた。これは、言葉に目を向けて学ぼうとする姿だと考えられる。

また、「支えとなる言葉を使って質問ができた」「『賛成』等を使って自分の立場を明確にした意見が言えた」「『可能性』等の言葉を使って問題点を挙げて話合いができた」といった児童の振り返りから、単元のねらいが達成できたことに加えて、自分の考えを形成するための支えとなる言葉の指導によって、考えや気持ちを適切に表現できるようになったことが伺える。さらに、今後の自分の表現に生かしたいといった姿がどの学年の振り返りからも見られた。これらは、児童が自分の考えを適切に表現できたからこその姿だと考えられる。

Ⅶ　研究のまとめ

１　成果

○　自分の考えを形成するための支えとなる言葉の指導を通して、児童が言葉に目を向けながら自分の考えを形成し、考えや気持ちを表す言葉を使って適切に表現する姿が見られた。

○　「支えとなる言葉を学ぶための支援」によって、支えとなる言葉が正しく使えるようになり、その言葉を基に、考えの形成につなげることができた。

○　「支えとなる言葉を基に自分の考えを形成させるための支援」によって、児童が支えとなる言葉を使いながら、考えを形成し、自分の考えや気持ちを表現することができるようになった。

○　「支えとなる言葉を学ぶための支援」と「支えとなる言葉を基に自分の考えを形成させるための支援」は、単元のねらいを達成するための助けになった。

２　課題

○　本研究は、自分の考えや気持ちを表現することに視点を当てたが、ほかの人の意見から、自分の考えを調整して表現するための「聞き方」の指導が必要である。

○　支えとなる言葉を基にした効果的な支援のために、「つかむ過程」の「言葉を知る」学習場面で、支えとなる言葉を精選させたり、意味や使い方を正しく確認させたりする必要がある。

Ⅷ　提言

本研究では、「支えとなる言葉を学ぶための支援」と「支えとなる言葉を基に自分の考えを形成させるための支援」という「自分の考えを形成するための支えとなる言葉の指導」を通して、児童が支えとなる言葉を使いながら、自分の考えを形成し、自分の考えや気持ちを表現できるようになることが明らかになった。また、それらが単元のねらいの達成の助けともなった。

国語科全体で、自分の考えを形成するための支えとなる言葉の指導を繰り返していくことで、児童が言葉への自覚を高め､考えや気持ちをより適切に表現していこうという意欲につながっていくと考える。

＜参考文献＞

・文部科学省　『小学校学習指導要領解説 国語編』（平成29年３月）　　東洋館出版社（2018）
・『教育科学国語教育　830号』　　明治図書（2019）
・小林　康宏　著　『「言葉による見方・考え方」を育てる！」子どもに確かな力がつく　授業づくり７の原則×発問＆指示』　　明治図書（2018）

＜担当指導主事＞

田所　由美子　　尾形　一美